

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	31 / 2012 / 1 - 15
タイトル	青森の昔の遊び座談会(上) 青森の冬は遊び天国
著 者 名	編集部

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

青森の昔の遊び座談会(上)

青森の冬は遊び天国

編 集 部

2012年1月26日、第30回役員会に引き続き昔の子供達がしていた遊びを記録する座談会が開催された。今回は、冬の遊びを中心として語り合った。

- と き 2012年1月26日(木)
ところ 青森市、ラ・プラス青い森
出 席 五十嵐 正俊 (3代、昭和8年3月生、居住地番号⑤)
五十嵐 豊 (6代、昭和10年4月生、居住地番号⑤)
徳 差 幸広 (6代、昭和11年1月生、居住地番号⑧)
棟 方 啓爾 (6代、昭和11年4月生、居住地番号⑦)
小 山 内 孝 (顧問、昭和12年9月生、居住地番号①)
室 谷 洋 司 (10代、昭和15年2月生、居住地番号⑨)
山 道 忠 郎 (14代、昭和18年12月生、居住地番号④)
工 藤 芳 郎 (17代、昭和22年1月生、居住地番号⑥)
扇 野 千 恵 子 (21代、昭和25年5月生、居住地番号②)
石 郷 岡 總 一 郎 (25代、昭和29年4月生、居住地番号③)



[図1] 出席者が住んでいたところ、その1。青森市から津軽半島を北上して蟹田町(現外ヶ浜町)、突端の龍飛地区。(出席者の番号に対応)



[図2] 出席者が住んでいたところ、その2。現在の青森市街地と東南側郊外の筒井地区、西南側郊外の高田地区。(出席者の番号に対応)

今年の積雪は記録的 …… 152センチ

五十嵐(正) 今年の雪の降り方は本当に異常です。12月の終わりから毎日、降り続いてもう3週間以上です。こういう経験は今までなかった。前に2週間連続はあったけど。

室谷(司会) 今までというのは、青森にいた生涯のなかで、ということ？昭和20年の冬、戦争が終わる年ですね、大変な大雪で2階から出入りしたという記憶があります。まだ5歳でこういう記憶とはちょっと異常、ただ母なんかから聴いてそれが自分の体験みたいに置き換わったのかも知れませんが。田舎は市街地から10キロほど離れた高田で父が県庁勤務、冬は通うことができません。それで(市内の)旭町通りに近い親戚に間借りしていたんです。この冬の大雪が強烈です。



五十嵐 正俊

五十嵐(正) そうだった。1945年、終戦の年です。当時は除雪車なんてない。屋根から雪を下ろすでしょう。住宅は密集しているからもう下ろす場所がない。結局、道路に下ろすしかない。するとどんどん道路が高くなって、家の入り口とは階段で、20段ぐらいですか、出入りすることになる。消火栓は掘っておかなければならない、それで深いものだからここに落ちたら上がれないですよ。そういう年で電線をまたいで歩いたとか、考えられないことがいっぱい。積雪の記録を見ると2メートル9センチになっている。累積ではない、これが青森市の最高記録です。(2012年の青森市は、結果として2月19日に積雪152センチになった。150センチを超えたのは7年ぶりといわれ2005年が178センチだった。)

徳 差 私のところはジャイゴ(田舎)だから、筒井ですね、2階からの出入りはなかったけど、雪で窓は隠れてしまう。いつものことです。ことしの場合は、日照時間はゼロですよ。

小山内 もうここまでくれば災害の可能性は大あります。もう発動しても良い時期ですね。

室 谷 この大雪では、これからが大変でしょう。今日の座談会はもう始まってしまっていますね。テーマは“昔の遊び”です。“やぶなべ会”のことですから、とにかく外での遊び、自然に浸りきった遊びを徹底的に思い出していきましょう。



徳差 幸広

悪質？悪ふざけ！ メンドチ(メンドツ)掘り

工 藤 遊びではありませんが、私は古川に住んでいましたが3月にはメンドチを掘るんです。

山 道 メンドチは遊びでしょう。それ懐かしいね。

五十嵐(正) 工藤さんもメンドチですか。

徳 差 筒井もメンドチです。落とし穴ですね。

工 藤 何と言ってもメンドチにダイバ。ダイバはカマクラとは言わない。

五十嵐(正) カマクラとダイバは全然、別。ダイバは雪合戦のためのもの。

五十嵐(豊) ダイバには屋根がない。メンドチは雪が積もった道路に穴を掘って、その上に雪のフタを薄く切ってのせておく。そこには足跡などをつけて分からないようにしておく。

棟 方 穴のなかに馬糞を入れておく。

五十嵐(豊) 馬糞を入れないとメンドチではないだろう。

徳 差 それは悪質だ。オレたち(筒井では)、そこまではやらなかった。メンドチは、罪の意識はあるけどそこまでは…。“門付け”ってありますね。三味線をもたないでカドツケがウーンと唄って歩いてきて米とか何でも下さいと。そこにメンドチを掘っておくとカドツケの人が落ちる。いま思えば罪悪感がありますね。馬糞ですか、そこまではやりませんでした。

棟 方 何も悪質ではない。馬糞といってもあの頃の馬糞は汚くはないんだ。(ねちねちした)ペゴ(牛)とは違うんだ。昔は、馬糞は至るところにころがっていましたね。

五十嵐(正) それは悪ふざけ(悪戯)ということでしょう。

小山内 そう、馬糞には大した悪い細菌が付いているわけではないし、せいぜい普通の大腸菌ぐらいのものでしょう。

室 谷 田舎の高田では馬糞なんて上品な言葉でない、マノクソ(馬の糞)です。良い肥料ですね。メンドチと呼んだかどうか、その落とし穴ですがウチの母に和裁を習うために、冬になると2、30人の若い娘が来ました。私は小学低学年でしょうか。玄関前の通りにやったんです。落ちました。その人は盲腸の手術のあとで切り口の縫ったところが剥がれたとって、あとになって母にこっぴどく叱られました。これは悪質ですね。マノクソは入れていません。今だったらどうなるでしょう、すぐ通報でしょうか。

五十嵐(正) さっきの馬糞ですが、昔はタラを買って、馬糞がいっぱい散らかった道路を荒縄で引っ張ってきた。

棟 方 エラに縄を通して引っ張ってくる。コッコ(卵囊)が裂けてもれないように必ずヒバのコツパ(小片)をさして(保護して)運んできた。馬糞なんて、タラは洗ったり煮て食べるので全然問題ない。

扇 野 その卵のところが裂けないようにするのは、今でもやっています。



五十嵐 豊



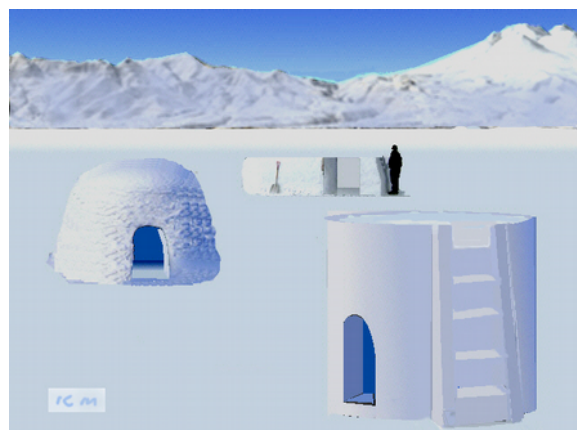
棟方 啓爾

ダイバ、シロ(蟹田)は子供たちの基地

室 谷 もう大変活発な、貴重な話がいっぱい。ところが場所がちょっと違うだけで“呼び方”とか“やり方”が違っている場合がある、ここが重要だと思います。自然のなかでの遊びとなると、やっぱり冬はすごい。メンドチがあつてダイバですか。

棟 方 その通り。冬は長いですから沢山あります。もれなくやりましょう。

五十嵐(正) メンドチ掘りがあつて次はダイバですね。雪合戦のため硬くなった雪をブロックのように積み重ねていく、壁だけ作る。中



[図3] 北片岡の田圃に並んだダイバ基地。(画:棟方啓爾)

から雪のタマを投げる。(相手のダイバの人と)投げ合う。タマは凍るくらいにギッシリと硬くしているのでまともに当たると怪我をする。

徳 差 ダイバと言う今のは、地域は古川ですが、私の方は筒井ですから郊外になる。ずっと田舎ですね。今の話ではデフェンス、つまり防御するというヤツですね。だとすれば違いますね、(筒井は)カマクラなんです。雪山のように作って、横からシャベルで掘っていく、横穴に自分たちが入って掘っていきます。あの、秋田県などのカマクラのようなものです。

室 谷 そこで何をやるんですか。ママゴト遊びとか。

徳 差 それはない、中で何をやるということはない。

五十嵐(正) そうそう、ブロックみたいに積んでいくでしょう。少しずつずらしながら、最後に上に蓋をする、そういうのも作りました。

室 谷 筒井のものと古川は違いますね。筒井は掘っていくわけですね。

五十嵐(正) もうひとつは、雪山の中に掘っていくのもありました。

徳 差 やっぱりそれもあるんでしょう。

棟 方 長島でも屋根はあるんですよ。屋根があるヤツで、これがないとダイバとはいわない。子供たちの基地みたいになる、そこに集まって餅を食ったりする。

ダイバというのは基地ですよ。大砲を撃つあれからで、台場です。雪合戦のためというのも確かです。夏になるとみんな小屋を作りましたね。そういう基地、夏でも冬でも隠れ家みたいなものが欲しかったんです。冬はほとんどダイバで過ごしました。家にいないでダイバばかりにいました。12月の暮れからで、田圃の雪が消えてもまだあった。水をかけて夜に凍らすんですから。また階段をつけて屋根の上に上がるようにもして、かなり立派なものです。(図3)

室 谷 田圃というと、あの辺だと操車場をまたいで南の方？

棟 方 いやいや操車場の北側でオレの家の回りは全部田圃、長島の東隣が北片岡でここは一面が田圃でした。あそこにダイバがいっぱい、ズラリと並ぶんです。

室 谷 ひとつのダイバを管理するのには親分がいるでしょう、何人ぐらいでやるんですか。

棟 方 5、6人で餓鬼大將は必ずいる、オレはおとなしいワラシ(童)でしたから親分ではない。山を作ってツルツルとテカラガシテ(照からかして)、それに餓鬼大將が一人ずつ上がらせる。滑って危ない。そういうこともやりました。

扇 野 蟹田ではそういうのをシロ(城)と言いました。雪を固めてブロックにして積み上げて家みたいに作って、そこでみんなで遊ぶんです。私は昭和25年の生まれですから、昭和30～35年頃も続いていました。

五十嵐(豊) シロということは、標準語になったんですね。

扇 野 シロを作ること自体がすごい遊びなんです。ブロックを沢山つくらないと。スコップで四角に切って、男も女もみんな同じようにやりました。

棟 方 ブロックで積むのと、雪山を掘っていくのと2種類あったということです。



室谷 洋司



扇野 千恵子

五十嵐(正) ブロックを積み重ねて窓も付けましたね。

小山内 良い遊びですね。群れるだけで楽しく遊べた。

山 道 私は小学校(橋本)の校庭に作った。近所の餓鬼どもが集まって作って。生徒達もいっぱい遊びに来た、結構大きかった。

室 谷 その場所が広いのか狭いのか、雪がいっぱいあるのかないのか、雪合戦だけなのか集会所の役割もあるのか、さまざまあったということですね。



山道 忠郎

コバ打ち、コゲ打ち

五十嵐(正) 冬の遊びでコバ打ちというのがあった。ヒバで作った棒を刺す。そこに別のひとが打って、前に刺したのを飛ばしてやる。

棟 方 コゲでしょう、オレたちはそう呼んだ。コゲには色々あるんですが、30センチから40センチくらいの長さで、ほかのものを倒すだけでなく一定のブロックから飛ばすというのもあった。また倒してから、それを場外に出さなければならぬ。倒れたのにパーっとやるとそれがパーっと飛んでいく。



五十嵐(豊) 基本的には自分が打った棒の長さまで飛ばせば良いことになる。打った棒が立っていれば良いが、ヘタクソ(下手)なのは寝て(倒れて)しまう。すると飛ばしやすい。飛ばされたものは自分(勝ったひと)のものになる。

[図4] コゲ打ち遊び(画:山口晴温画伯)

棟 方 色んなルールがあったと思う。

室 谷 高田ではそれはなかった。外で実際、実演して貰わないとちょっとイメージが湧かない。打つところは雪のどういうところ、広さは? 投げる順序はどう決める? Aが打ってそれが刺さり立ったとして、BがAのものを倒して飛ばしたとするとBは刺さらないし立てないでしょう。

小山内 挿絵か何かを書かないと分かりにくい。

五十嵐(正) やったのは小学校の高学年のころかな?

棟 方 いや、終戦の直前だから2、3年生だと思う。勝ってとったのは薪みたいにして燃やすんです。コゲの先をトガラガス(尖がらす)には焼くんですよ。ナタとか刃を使わなかったから。それで“コゲ”と呼んだのではないかと思っている。コゲラガス(焦がす)ということで。あれは面白かった。勝ったひとは、このくらい、2~30本も集まって家に持ち帰った。

徳 差 薪がわりにするとは、子供達も(家事に)貢献していたことになる。

龍飛ではソリ遊び

室 谷 昭和20年のころは、小山内さんはどちらにいましたか?

小山内 龍飛(津軽半島の突端)です。龍飛では手作りのソリで遊びました。今でいえばルーージュのようなもの。灯台からではなく、下から見ると左側に墓があり焼き場(地面にコンクリートを敷いただけ)があり、その道路の下側からソリで下まで滑ってくるんです。急な崖のようなところもあり危なかったですね。蛇行していて500メートルはあったでしょう。

室 谷 ソリは何で作るんですか。

小山内 シナノキとか加工しやすくて強い木で子供達で作っていました。制動というかブレーキは足。龍飛は雪が少ないんです。固まって氷みたいなのところを部落まで滑ってくる。

室 谷 龍飛には子供達は何人ぐらいいましたか？

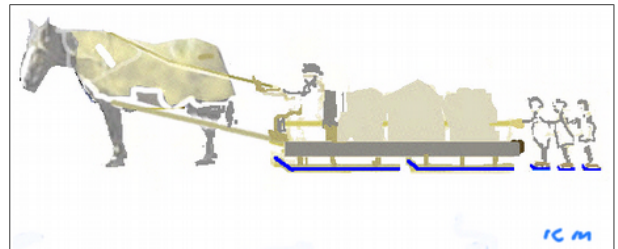
小山内 7、8人から10数人ですね。



小山内 孝

ベンジャ、竹スキー、雪スケート

室 谷 ソリの話が出たが、市内では山がないからソリとかベンジャなどやらなかったんですか。



棟 方 ベンジャとか竹スキーとか市内でもいっぱいやりました。

【図5】ベンジャで馬ソリに掴まって滑っていく。(画:棟方啓爾)

室 谷 どこにスロープがあるんですか？

棟 方 スロープじゃない、国道を走って歩く。馬ソリのうしろに掴まったり。ベンジャというよりも竹スキーですね。

室 谷 ベンジャですが、これはところによってモノが違うんですね。町なかでは下駄みたいなものの下にスケートのような歯があってベンジャと言っている。高田なんかの田舎ではネマガリタケを4、5本並べて、針金を横に通して長靴を載せるくらいの幅にする。前の方には縄が付いていてそれを手でおさえながら滑っていく。長靴を固定するのもあった。その竹ですが大人たちが畑仕事につかう、テシバという支え棒に使うために奥山からネマガリタケを沢山採ってきてある。それをちょっと子供達が拝借するんです。親たちは、それは(遊び用に)折り込みずみです。



【写真1】ベンジャ・ソリ遊びに興ずる子供たち。(青森市高田熊野宮境内、1962年1月、撮影:室谷洋司)

棟 方 そのベンジャは見たことがないね。

室 谷 そうなんです。北彰介の「オモチャッコ」(1975)という本を見るとベンジャは棟方さんが言ったようなもの。下駄のような形で下にスケートのような歯が付いている。それで馬ソリに掴まったりする。田舎のネマガリタケで作ったのでも馬ソリに掴まりますが、スロープとかの山はどこにでもある。村内では熊野宮というのがあって、ここには急なところ、緩やかなスロープがいくらでも。初球コース、上級コースで小さい子供から中学生くらいまで何十人も遊んでいる。遊び道具はベンジャとかソリで、ソリも手作り。

- 徳 差 筒井は、やはりベンジャで完全に竹スキーのこと。火で焼いて先を曲げてつくった。下にスケートみたいに付いたのは見たことがない。竹はモウソウチクで町に売っているんです。火で焼くと言ってもシブト(囲炉裏)であぶると油が出てきて曲げやすい。曲げてすぐ固まって、ちょうど良いかたちになる。それに乗ってケド(県道)で遊ぶ。
- 室 谷 今ではなかなか考えられないことですが、市内と、いくらか近い筒井、約10キロは離れた高田とは全然違うことになる。まず遊ぶ場所に違いがあるし、材料の調達にも格段の差がある。モウソウチクなど市内では売っていたのでしょうか。高田では手に入りません。そこで地物のネマガリタケになる。村社会で地産地消です。
- 棟 方 町中の方ではベンジャは下駄のような、ガツパとも言ったのではないか。
- 扇 野 そう、歯が付いていない舞妓さんが履いているポックリみたいなやつですね。あれがガツパでしょう。
- 棟 方 ベンジャはそんなに長い期間はなかった。ベンジャからすぐ雪スケートに変わったはず。
- 山 道 私たちの時代は長靴を付けるスケートになっていた。
- 徳 差 スケートでしょう。私も今の青森高校まで行かない、筒井中学校あたりのケド(県道)がカーッと堅くなったときに滑った、最高でした。近くの苗代で滑ったこともある。長靴を付けるスケート、あれを買うのは大変だった。堤橋に近い小杉金物店だったと思うが、そこに売っていました。ところがクツをつけるところと刃が離れてしまった。ハンダでくつつけるんですが、すぐ離れてしまう。不良品だったのかも知れない。結構高かったんですよ。
- 室 谷 あまり若くはないけれど、そちらの若いかがたはいかがですか？
- 工 藤 雪の球を作って、それを塩をかけたり水をかけたりして凍らして堅くする。それをぶっつけて相手の球を壊し合いをする。
- 五十嵐(豊) オレたちはそういうことはしなかったですね。
- 石郷岡 多分、私が一番若いですが、竹スキーなどはもうなかったですね。誰かがやっているのを見たという記憶はある。今の雪玉割りはよくやりました。さっきのダイバですが、ウチの近くでは掘った方です。安方では町中ですから、雪をかたづけて山盛りになったところが方々にありました。横穴を掘って、そのあと縦穴になって上に出られるようにしました。
- 室 谷 善知鳥神社があるところですから、大きい沼がありましたね。スケートは？
- 工 藤 私たちもやりました。落ちたりして。縁が解けて薄くなっていたんですね。
- 山 道 あそこはかなり広かったですね。かなり埋めてしまった。
- 石郷岡 善知鳥神社の北側に道路がありますが、昔はずっと狭くて木の杭の土留めがされた1メートルぐらいの細い道があるだけ。そしてすぐウチ(敷地)です。
- 工 藤 さっきの長靴につけるスケートですが、先にギザギザがついてフィギュア・スケートのようにつま先で立てるのもありましたね。コゲル(漕げる)やつです。その値段はちょっと高かった。
- 室 谷 もうそろそろ春に行きますか？
- 棟 方 とんでもない、まだ冬まっただ中ですよ。ズグリ、ズグリ…。

ズグリ、さまざまな遊び方

五十嵐(正) ズグリ遊びをするときは長靴で雪を踏み固めて、真ん中あたりをこする。ミラー板になる。ちょっと窪んだところにパツと入れて回す。

五十嵐(豊) あれはヨダレ(涎)を付けてキュッキュッと磨いて作った。そのように自分の土俵を作るわけ。ポーンとそこうまく入ればネル(寝る)んだ。もうピターッと動かないように、静止したように回っている。それをダメツて(固唾を飲んで)見ている。

室 谷 そこで持続時間とか、さまざまな競技があるわけでしょう。

五十嵐(豊) ハイハイ、まずどっちが勝ったとか負けたとか。今の場合は長く回っていたほうが勝ちですね。

五十嵐(正) 同じところに別のひとがもう一個入れる。するとどちらかがはじかれることになる。

棟 方 そう、回っている時間だけでなくコゲと同じように(相手のズグリを)飛ばすんだ。場外にはじき出すのが面白い。

室 谷 土俵の大きさはどのくらいになりますか。

棟 方 1尺ぐらいだ。

五十嵐(豊) 飛ばすのは、まず傍で回して紐で土俵に入れ込む。すると前からあったズグリとカチンとぶつかって、どちらかが出される。

小山内 それ、(勝負の)要素としてはどのようなズグリを手に入れるとか、縄というか紐ですね、大事なものは。

徳 差 五十嵐(豊)がしゃべったヨダレを付けて回すところ、オレたちジャイゴ(田舎)ではトメと言った。何でトメと言うのか。ズグリを回してそこのトメに、“シーン、シーン、シガリのバーバ^{注1}”と言って



[図6] ズグリ回し(画:山口晴温画伯)



[写真2] ズグリ回しの再現。雪ん子広場(安田・県営総合運動公園)でタコ揚げ、ダイバ遊びも行われた。(1979年2月4日、撮影:室谷洋司)



[写真3] 棟方が今でも保存しているズグリ。

注1 ズグリを回すところとかけ声:地域によって呼び方が違った。黒石方面では“シミドコ”、青森方面では“ネドコ”、弘前方面では“パンコ”などさまざま。新城・油川・滝内などでは、前夜から水をかけて凍らしておき、これを“氷場(スガバ)”と呼びここで回した。回すときは、“シンガー! ソレ!”と言った。“スガバに、それ!”という意味でなかったかと推察している。(「オモチャッコ」、北彰介、1975年)

やるん(投げる)です。“シーン、シーン”は、“スシーン、スシーン”と言うか、ハッキリしたシでなくスが混じったような発音(津軽弁ではシとかスと明朝な発音はしない)。“シガリ”のシも同じで、シガリというのは田舎ではアシナガバチのことです。回すところは、ヨダレを付けて固くし、そこをトメと呼んだ。トメは小さく4~5センチぐらいの楕円形だった。おのおのが作ってそこで回して勝負する。一番長く回った方が勝ちで勝ったひとが負けたひとのズグりをガッパする(打つ)。雪にぶつつけるんです。割れる場合もある。割れてもいいんだ。

室 谷 ガッパするって何となく分かるんですが。

徳 差 ズグりを負けた方のペナルティー。雪の堅いところを選んでガッパを打つ。カッパにするとするのは倒すとかひっくり返すということですが、それが誂ったものかも知れない。

小山内 要するに、罰ということだ。

徳 差 ズグりは選ばなければならない。色もちちゃんと付けて。だから良いズグリというのが第一です。右のひとが投げるには縄を内巻きにしなければならない。外巻きにすればオグレデ(遅れて)しまう。内巻きに巻いてシーン、シーン、シガリのバーバと言って放り出す。ちようどうまくトメに入るとさっき言ったようにネルということになる。ずーっと回り続ける。問題はズグリの立つところのサキツチョ(先きつちよ)だ。あんまり円くしても駄目だし、適当に尖っていなければならない。ここが、選ぶときの大変なところなんだ。

五十嵐(正) ズグリの造りもゴロンと厚っぱいのと小さい薄目のものまである。紐を作るときは最初は細く、段々に太くしていく。尖った足のところに絡めるが、そこが(紐が)細くないとダメなんだ。

徳 差 その縄を作るのは太い方からやっていって最後に先端の方を細くしていくんです。そして丸く結んで終わり。そこから(細いところ)ズグリの足にかけて巻いていくんです。それとトメの作りが勝負の決め手です。

棟 方 そのトメを作るときはズグリのどこでコスっていたか。足のところでなくて腹のところですね。

五十嵐(豊) そう、縁の膨らんだところですよ。

徳 差 紐というか縄づくりがポイントだ。縄をずっとナっていくとバサバサしてきますね。それを火のうえであぶって、細いのを取り除く。ツマゴ(藁で造った靴)とかワラジなんかもそのように仕上げていたでしょう。藁は打って柔らかくして、パサパサしたところは焼く。

室 谷 さっき徳差さんがズグりを投げるときシーン、シーンとか、何かまじないのようなことを言っていたが、確か我々の高田でも何とかなっていたような気がする、思い出せませんが。(注1)それを今でも覚えているとはスゴイこと、随分ハマっていたのでは。いまの話は昭和20年前後から24,5年頃です。そっちにいる方々は昭和35年から40年頃ですね。どうでしたか、ズグりは。

扇 野 ズグりは女のひともやりましたよ。男のように上手にできなくて負けてましたけど。ズグリの喧嘩はできなくても、どのくらい長く回っていたかです。ズグりはいっぱい売っていましたが、その選ぶのが私たち、下手だったのでは。男のひとみたいに熱心に選ばないし適当に色なんかを見て買っていました。

棟 方 こういう遊びは子供たちのかなりの時間を占めていました。オレの場合はズグりに色を付ける、クレヨンで。すると色が微妙に交じりあうんだ。

扇 野 (初めから)色が付いていませんでしたか。

棟 方 付いているんだけど満足できない。それでクレヨンで縦に色を付ける。回転すると色彩が混じってすばらしい。

徳 差 オレの場合は、色を横に付けている。ズグリの中は段々になっているのでそれぞれの段に自分の好きな色、クレヨンを塗るんです。それをローソクの火で熱を加え指で伸ばす。

棟 方 それでは変化がないんです。

五十嵐(豊) ずっと回ると色が白くなるのでは？

山 道 私の考えでは黒くなると思うけど。

棟 方 絵具と違って必ずしも黒くならない。絵具は減法混色で混ぜると黒くなるが、これは回転するんで加法混合の1種で綺麗な混色になるんじゃないかと思う。

工 藤 私たちもズグりはよくやった。ただその時代は短かった気がする。石郷岡さん、どうですか？

石郷岡 やりました。ただ紐は既製品だった。綿で作ったものでなかったか。

扇 野 藁ではなく麻で作っていたような気がする。大きいズグりがあって、それで全部がはじかれてしまったりして。

棟 方 オレたちはベーゴマの経験がないんだ。津軽にはベーゴマが入っていなかったのでは？ズグりは今でも大事にとっています。(写真3)



工藤 芳郎



石郷岡 総一郎

ウサギ追い、ウサギの止め足

室 谷 小山内さん、龍飛ではズグりはどうでした？

小山内 ズグりはあまりやらないな。ズグりがやるような、そんなに雪が付かない。さっきのソリとか、あとは室内で新聞を四つに折って、ビタではないがバシバシとはじいて遊んだね。

五十嵐(正) それビタでしょう。よく遊んだね。買ってくるのではなくて自分で紙を折って作った。

扇 野 やはり龍飛だと寒くて風が強くて家に閉じこもる子供が多かったんでしょうね。

棟 方 気候の違いが遊びに大きな影響を与えている。

室 谷 龍飛はすぐ海、海で何かやりませんか？

小山内 海はべらぼうに荒れて、2、3月と海がゆるんでくれば遊びというよりフノリとか食べ物を採るんです。春になると潮が引くから子供たちは海に行ってやる。すると親たちに褒められるんです。とにかく龍飛は外は厳しい。それから、春近くになるとウサギを追う、ワナを仕掛けて。これがなかなか採れない。追い込むんだけど、ウサギは早くて。人数が多いと別ですが。

室 谷 我々も近くの山でワナをかけた、クグシと言って細い針金をウサギの頭がちょうど入るように輪にして通り道にかけた。

棟 方 そう、追い込まないんです。通り道にかけておいて戻るときに入るようにする。

小山内 人数が多いときはアミみたいなものを持ってやったんだ。ただひたすら追いかけて遊んだということですね。なかなか採れません、たった一匹採れた記憶があります。

室 谷 ウサギは田舎では冬場の大事な食糧だったんです。

棟 方 ウサギの“トメ足”というの知っていますか？ 足跡をずっと追っかけていきますね、すると足跡がなくなるときがある。これをウサギのトメ足と言うんです。マタギがよく言います。追跡をかわすんですよ。数メートルを飛ぶ。雪原では飛ばないんですが、ブツシュとかになるとトメ足をかける。もう追跡不可能です。ウサギは弱いなりに知恵をつけている。

凧揚げ、ブンブン、ミョンミョ

室 谷 それでは凧にいきますか。

棟 方 皆さん、凧揚げなんて全然やったことがないような顔をしていますね。

全 員 いや、そうでないですよ、これは大変だった。

棟 方 オレはね、凧揚げは今日の山なんだ。オレの家は、いまは町のど真ん中だが、東は全部田圃だった。その北片岡は、今の五所川原の方で大会などをやっているが、あれと同じようなものだ。ヒンコ何枚とかのすごい凧を飛ばしましたよ。凧のシツポは荒縄で、それが20メートルぐらいになる。今の五所川原はよく見ていないが、あれ以上ではないですか。(北片岡では)それがずっと並んで飛ばしていたんです。



[図7] 凧揚げ。(画:山口晴温画伯)

徳 差 今の長島のところがそうだったんですか。

五十嵐(正) 凧揚げは広い場所がなければ、そんなのは飛ばせない。

五十嵐(豊) あのブンブンの鳴り方はまたすごい。

棟 方 そうそう、ブンブンとミョンミョがあるんだ。青森は、当時はブンブンでないんだ。津軽はブンブンのようだがブアブアとオレにはうるさい。オレたちが小さいときはミョンミョ、ゴムの幅が広いのを付けるんです。ミョンミョンとかミュンミュンとか音がいい。

徳 差 そうだ、二つあったね。縄の尾っぽ(?)付けるのと幅広いゴムを付けるのがあった。オレたちは生ゴムの広いのを付けた。

工 藤 大きい凧は杵をヒバで作っていましたね。

徳 差 オレの兄貴は凧づくりが最高だった。ヒバを薄く切ってヒンコ何枚だのと言ってどんどん大きいのを作っていった。大きくなれば尻っぽの縄も長くなっていく。

室 谷 ヒンコ何枚、ヒンコって半紙1枚でしたか、半紙何枚分とか。

徳 差 いや、畳1枚がヘンコ1枚となるのでは？

小山内 そんなに大きくはない、ヒンコ1枚は西洋紙1枚くらいでないですか。

五十嵐(正) B4くらいだと思う。これは調べてみないと^{注2}。

棟 方 当時は凧の喧嘩をやりましたね。凧の糸を切るんだ。

注2 凧の大きさを表す“ヒンコ”について:「オモチャツコ」(北彰介、1975年)によると、ヒンコ何枚とかヘンカ何枚と言われるが、津軽凧作りは仙花紙(=コウゾを原料にした厚くて丈夫な和紙)で、これが訛って“ヒンコ”などになった。大きさについての詳記はない。

徳 差 喧嘩ダコですか、オレたちはあまりやらなかった。

室 谷 実家のあった高田あたりは周りが全部、田圃でしょう。今みたいに送電線などありません。小正月あたりから堅雪になってどこでも風揚げはOK。大きいのも小さいのもいっぱい上げていた。棟方さんのところは町のすぐ近くだから、密集しておのずと喧嘩ダコみたいになったのでしょう。その電線ですが、あれは感電とか危ないんです。東北電力などでは危険防止に躍起になっていました。それで住宅地が拡大するにつれてどこでもできない、段々すたれていったのでは？

徳 差 筒井の方でも、風の尻っぽが電線に絡みつくとというのがよくありました。

五十嵐(正) 我々の北金沢の場合は近くに線路があったでしょう。色んな電線が何本もあって、だから風揚げの場所にはよくなかった。

五十嵐(豊) 西風で上げるわけだから、あの辺での風揚げもあったでしょう。

棟 方 北片岡の場合は、東西に広く西風で上がる向きが線路の方にはいかないから最高の場所だった。皆んなが集まってきた。

五十嵐(豊) 風揚げは、油川では今でも年配のオヤジが上げている。若いときから好きなひとはやめられないんでしょうね。

徳 差 ひとつの快感なんです。ある意味ではジャッコ釣り、魚釣りですね、あれと同じですよ。人間の本能のようなもの、釣りの場合と同じですね。

棟 方 オレたちは小さいものだから大人が大きい風の紐を腰にしばりつけてくれる。すると引っぱられていく、グググッと。すると大人たちは笑っている。

五十嵐(豊) 糸が切れると風が飛んでいってしまうでしょう、折角の風が。泣きたくなくなってしまったりして。

室 谷 その紐というか糸はアンジョと呼びましたね。

棟 方 古川に風絵がうまい人がいましたね。オヤジさんがすごくうまかった。ニコニコ通りの角のところに風屋があった。

工 藤 一郎屋自転車店です。そこの人は競輪の選手をやっていました。風をいっぱい玄関に飾ってあるんです。高くてなかなか買えなかった。あの時代で何百円でしょう。

徳 差 オレたちの場合は堤橋があるでしょう、あれより筒井の方で今の労働金庫とか森林組合のあたりで北川という店でした。武者絵、大石内蔵助とか頼朝とか義経など、ちゃんと風に仕上げて売っていたが結構高かったですね。買いにいくんではなくて見にいくんです。それで、うちの兄貴は自分で作ったんです。

扇 野 私たちの同期の、今お坊さんの佐々木さん、あのひとは風絵がうまいんです。わたし1枚貰いました。あのひとは芸術家なんです。紙漉きをやってたり。

小山内 今は飛ばす風ではなくて、芸術の風絵になっている。本当は遊びの道具で空に上げて眺めるのが一番なんです。

冬の遊び、さまざま

徳 差 雪遊びでは、ほかにどういうのがあったかな？

棟 方 いっぱいありますよ。女性を前にしてちょっとですが、オシッコで雪に絵を描くのもありまし

た。それから雪に顔をつけて顔形を残すんだ。人面がそこに残る。こういうのを数えるとさまざま出てくるよ。戦争体験を話せる人も少なくなっているでしょう。このような遊びも同じです。そんな社会になっていく。わが「やぶなべ」は、若い世代もいるけど段々昔のことを話す人が少なくなります。

室 谷 オシッコで絵を描く、というのは分かりますね。その飛ぶ距離を競うのはよくあったね。今、こういうのが出ましたが、タイトルだけでいいですから沢山、思い出してくださいませんか。今はみんな雪をカタキにしているけど、結構雪が消えるまで楽しかったということ、心身を鍛えてくれたし。

さっき、ウサギを捕まえるというのがありましたが、遊びではないですがトラバサミというワナをかけてイタチを採った。あまり例はないがテンがかかったこともあった。これらは毛皮として高く買ってくれるところがあるんです。“石弓”というのがありますね。Y字型の木の枝で上の2か所からゴムを伸ばして、弾丸として小石をゴムに当ててグーツと伸ばして放すと小石が飛んでいく。標的はスズメです。人間は狩猟の血を引いているんですね。

スキー …… 遊びからスポーツに

小山内 私は龍飛から高田に行きました(父の転勤で)。高田へ行って楽しかったのはスキー。スキーと言っても粗末なもの、すぐ脱げてしまうスキー。ゴム長を付けて滑るやつで、紐に金具が付いてバチンとやってくっつける。それを履いて豆坂(青森空港に至る旧道で急な坂)の方に行ったんです。坂の手前がリング畑でシミダ(凍った)リングが枝に付いていてそれを食う。本当にうまくて楽しかった。あれもひとつの遊び。帰りは吹雪いて大変、途中でスキーが脱げてしまってやっとのことで帰ってきた。

工 藤 オラダチ(俺達)はスキーをかついで浪館まで歩いて行った。古川中学校からはずっと田圃だった。

五十嵐(豊) オレたちは子供の頃はスキーなんてなかった。

小山内 そうかも知れない。我々の頃、ようやく板のスキーと長靴を付ける、バシンと板に付けるのが出回ってきたと思う。

五十嵐(正) オレは小学校のとき1回新城へスキーで行った。あとは家の回りで歩くだけ。

徳 差 兄貴がスキーを買ったんです。板スキーだが何も塗りは塗っていなかった。こっそりそれを借りて駒込川の上流の段差のあるところ、土手ですね、そこで滑ったんです。それで溝に突っ込んでしまいスキーを折ってしまった。こっそり借りて行ったものでしょう、これは大変だと思いました。ところが意外、怒られなかったんです。どういう風にしたかと言うと、修復はトタン板で折れたところを巻いて、上からクギを打って直した。今でも思い出します。スキーは学校で教わることはなかったし、それで社会人になって大鰐に行ったときも、曲がったり止まる時が大変だった。

山 道 今みたいに接着剤があるわけじゃないね。

五十嵐(正) 私は社会人になってからスキーをやりました。最初は立てなかった。営林局というのは靴を買えば、板は官費で買ってくれました。ただ靴は高くて1か月の給料(初任給は3350円)では買えない、月賦です。家が古川だからさっきの浪館ですが、今の慈恵会病院があるところがスロープでした。

五十嵐(豊) オレが入ったときは(営林局に)、初めてスキーを買ってくれた。冬山に行くときは全部

スキーだったから。冬になると課対抗の大会があった。初めてのスキーでコースを回ることが出来ず大変苦勞した。

室 谷 さっきの新城のスキー場ですが、小山内さんところ(家)がその頂上に当たるんですね。当時の空中写真を見るとあの一带は広々としたスキーに良いところだった。ところが全部が住宅地になってしまった。

工 藤 市内のスキー場は戸山があつて浅虫にもあつた。戸山は小さいが急だった。浅虫は高級で汽車に乗らないと行けない。浅虫にはジャンプ台もあつてスキー大会は浅虫だった。雲谷ができてから皆んなそこに行くようになった。

室 谷 高田にもスキー場が出来たんです。今の太陽台という団地があつて、その北側でヒュッテがあつてそこからロープウエーが下まで付いていた。雲谷ができてそこが大賑わい、そのため小学校のスキー大会など雲谷でできない。そこで高田スキー場が市内の小学校対抗のスキー大会の会場になったんです。昭和60年代まではあつたと思います。スキーはその後、どんどん高級化、高度化していった。今、ちょっと足踏み状態か、若者にはスノーボードなどが幅を利かせている。子供たちが遊び気分ではとつても行けませんね、危なくて。

遊びは人間の本性、ホモ・ルーデンスだ！

棟 方 とにかく、外で暗くなるまで遊んでいるものだからオフクロが心配して迎えにくる。雪オナゴ(女)出るぞ、と言って。

扇 野 とにかく子供は雪が好きです。本当に好きなんです。

室 谷 そうです。ところが今は車が氾濫して人が追いやられてしまった。親も、危なくつてしょうがない、ついつい家の外は(子供には)危険だらけになってしまったんです。

小山内 今日、昼頃おりてきたら(自宅が旧新城スキー場のてっぺんにある)小学校の生徒が帰る頃で、何とお母さんがたが車で迎えにきている。あれは悲しい風景です。爺ちゃん婆ちゃんが迎えにきている場合もありますね。

室 谷 それ、小学校だけでないですよ。我々の後輩の青高生もそうなんだ。私は桜川に住んでいる。近くが青高でよく近くに行きます。この前の土曜日も、校庭のサクラが雪に埋もれてどうなっているか撮影に行った、午後3時頃かな。裏門の体育館があるところ、その横の広場が教員の駐車場で、そのまわりを囲んでズラッと父兄の車がひしめいている。なかでお母さんとかが待っている。土曜日だから補習なのか何なのかわかりませんがお迎えですよ。我々「やぶなべ」の後輩がそのようになってしまった。もうひとつ、ウチの息子の勤め先は問屋町で朝8時頃に家を出れば十分です。ところが7時には出ていくんです。ちょうど青高生の車での送り時間で、この渋滞を避けなければならない。被害者意識でブツブツ言っている。

小山内 子供が遊びを知らないで成長するのは恐ろしいことです。そもそも人間というのは、本質はみな遊びのために生きているんです。さっき風揚げで言いました。あの広い空の空間でしよう、音でしよう、絵っこでしよう、それに引っ張り具合、あらゆる人間の感覚を刺激する。

室 谷 結局、そこを言いたいわけでそろそろ座談会の、今日は冬編ですがまとめに入りましょう。小山内さんは風揚げでスゴイことを言った。遊びは人間の五感というか第六感まで使いつくしたものだと思う。ただ、子供たちには進学とか就職など競争社会になってしまっている。動き回るのには車がないとどうしようもないとか、社会全体が複雑怪奇な状態になってしまっている。

棟 方 「やぶなべ会」は、今まで重要な座談会をやって会報に載せてきました。そのなかで、実は

今日の遊びの座談会は、オレはもっとも重視していました。遊びが人間の本性で、ここが今なくなっている。今の社会の大変なネックがここだと思うんです。

五十嵐(正) 時間がないんだ。場所ありません。

棟 方 そこです。だからそれがおかしいと、「やぶなべ会」がこういう座談会で紹介して、ひとつの問題提起をすべきではないかと。もっと余裕のある社会を目指していかないとダメです。経済オンリーの社会だけではなくて、そこには何かがあるでしょう。人間というのは“遊びの人”です、何とかルーデンスと言っていますね。

小山内 ホモ・ルーデンスです。ホモは人、ルーデンスはある一定の遊びを作るという意味でしょう。オランダのヨハン・ホイジンガという哲学者が言ったものです。

棟 方 知恵の人というのはホモ・サピエンスだが、これよりもホモ・ルーデンスが「やぶなべ」の原点ですよ。しかも、それは自然のなかで大いに出来ることで、青森だから冬にこだわるというのが大事です。

小山内 子供にとって冬というのは、遊びを工夫するもってこいの季節なんです。

棟 方 まさに大人の社会が子供から冬の楽しみを奪ってしまった。

五十嵐(正) ちっちゃい子供は目がキラキラしている。ところが小学校の高学年、中学校になるとうつむいて全然目に光がない。

小山内 北欧などはスキーが強いでしょう。あれは野山をスキーで歩く、自然のなかで楽しんでいる。

棟 方 ノルウェーなどは、勉強は校内よりも屋外で多くやるんです。この前、三内のある小学校の近くを通ったら先生が子供たちを外で遊ばせている。子供たちの喜びようは大変。道路が低くて校庭が高い。そこを子供たちはダー・・・と登っていく、先を競って。これ、子供が一番楽しいんだ。ただ先生は大変だったと思う。さっきの風揚げは国際的になりましたが、やっぱり津軽風が一番ですね。今は五所川原ですが、青森でも大いにやった方がいいですよ。あのネブタばかりだと悲しい。新幹線がきたからネブタ、ネブタ、何ですかこれ。もっと知恵を活かして人間らしい文化、しかも雪を活かしたものがいっぱいある。

五十嵐(豊) 昔は車も少なく、小さい道路は除雪もない。それでどこでも遊べたんです。もちろんテレビなんて無い、子供は外で遊ぶのが仕事。そこで色んな遊びが生まれたんだろう。その意味では今の子供たちは不幸だと思う。小学校で校庭にスロープを作ってスキーをしている所もあるが、学校でコゲ打ちとかズグリ回し、風揚げなど昔の遊びを教えられないものだろうか。でも、もう昔の遊びを知っている先生がいないのかも知れないが。

室 谷 あの岩木山の自然が損ねられると大騒ぎしてやっと出来た鱈ヶ沢のスキー場は、今は韓国の資本で韓国人でいっぱいです。八甲田山にもオーストラリアとかニュージーランドからずいぶん入っているそうですね。青森県人が気づかないうちに海外から注目されている。雪を媒介にして、これからの世代に伝えていかなければならないことがいっぱいありますね。今度は春から秋までをやきましょう。

(次号に続く)